

気分一致効果の生起要因について

伊 藤 美 加

A Moderator of Mood-Congruent Effect

ИТОH Mika

1 はじめに

悲しいときに、まわりの景色がもの悲しく見えたり、悲しかったことばかりをなぜか思い出して、よけい悲しくなってしまう。このような日常生活でよく起こる経験は、感情がその後の認知過程に何らかの影響を及ぼしていることから生じる。1980年代以降、認知と感情との関係に関する多くの認知心理学的研究が行われ、新たな知見が見られるようになった（レビューとして、Blaney, 1986 ; Bower, 1991 ; Ellis & Ashbrook, 1989 ; Guenther, 1988 ; Kuiken, 1991）。本研究では、感情と認知の様々な交互作用の中でも、日常頻繁に観察される感情であり、実験室においても容易に喚起させる、感情の比較的穏やかな一時的感情状態である、気分（mood）に焦点を当て、主にポジティブ（例；楽しい、高揚した）気分とネガティブ（例；悲しい、憂鬱な）気分が認知にどのような影響を与えうるのかという視点のもとに検討を行い、両気分が異なる過程を含むことを示したい。

気分が認知に及ぼす影響において、特定の（例；悲しい）気分の時にその気分と一致する特定の感情価を持つ（例；悲しい）刺激の認知が促進されることを気分一致効果という。記憶研究では、気分一致効果は、特定の感情価を持つ刺激がそれと一致した特定の気分の時に符号化あるいは検索されやすいとされる。例えば、気分が良いときは気分が悪いときよりもポジティブな内容の情報をよく覚えていたり、ポジティブな出来事ばかりを想起したりする。印象形成や対人評価等の社会的判断研究では、気分が記憶以外の認知に及ぼす影響を評定や反応時間を指標にして検討しており、特定の気分の方向に評価や判断が偏るとされる。例えば、気分が良いときは気分が悪いときよりも対人評価判断で相手を肯定的に評価したりする。ここでは、記憶における気分一致効果を気分一致記憶、判断における気分一致効果を気分一致判断とし、両者を区別する。

両者を同時に扱った代表的な研究として、Bower, Gilligan, & Monteiro (1981) が挙げられる。彼らは、被験者を催眠によってポジティブ気分あるいはネガティブ気分にして、楽しい物語（Andre は全てが彼にとってうまく行き幸せな人物として描かれていた）と悲しい物語（Jack は何事もうまく行かない不幸な人物として描かれていた）の両方を読ませた。次の日に気分誘導を行わない自然な状態で被験者に物語の内容の再生を求めると、全体の再生量は同じであったが、気分と一致した人物の情報をより多く思い出した。つまり、ポジティブ気分を誘導された被験者

は Andre に関するポジティブな出来事の再生の方が、ネガティブ気分を誘導された被験者は Jack に関するネガティブな出来事の再生の方がそれぞれ多く、気分一致記憶を示した。更に、被験者に物語を読んでどちらの人物に自分を同一視したかを尋ねると、それぞれ誘導された気分と一致した人物が選ばれた。つまり、ポジティブな気分を誘導された被験者はポジティブな人物 (Andre) に同一視し、ネガティブな気分を誘導された被験者はネガティブな人物 (Jack) に同一視するという結果も見い出せた。これは文章の読みの間に生じている気分の生起が物語の読みそのものを歪めることを意味し、気分一致判断を示す結果となっている。このような気分一致効果は日常場面でも実験室でも生起する一般的な現象とされる (Blaney, 1986; Morris, 1989; Singer & Salovey, 1988)。

特に気分一致記憶における近年の研究動向は、気分と記憶材料が持つ感情価の一致・不一致や、気分の効果の有無に関する検討から、ポジティブ気分とネガティブ気分との認知過程への影響の違いに基づくアプローチへ移行している。具体的には、気分一致記憶はポジティブ気分の効果は認められやすいのに対して、ネガティブ気分の効果は弱い、あるいは認められないというような、気分の質による効果の違いを検討する。これは気分非対称性効果 / P N A 現象 (positive-negative asymmetry effect) とも呼ばれる。気分が直接認知過程に影響を及ぼすという気分一致記憶研究が、誘導の失敗などとして無視してきた気分の非対称性効果を積極的に扱い、本来の気分の効果を検討しようとしていると言えよう。

気分一致記憶の理論的解釈として、前述の動向は記憶と感情のネットワークモデルから、スキーマモデルへの移行という、気分一致効果の理論的背景の変化と合致する。前者が感情はそれに連合する概念表象を活性化させ、相反する感情及び連合する概念表象の活性化を抑制すると仮定したシンプルなモデルであるのに対し、後者は感情と結びついたスキーマを活性化すると仮定したより精緻なモデルである。

Beck (1967) は抑鬱者の体系的臨床観察と実験的検証研究から、抑鬱者や抑鬱傾向者の情報処理がネガティブに歪められているのは、自分、まわりの世界、将来についてのネガティブに歪んだ独特のスキーマを形成しているためだと考えた。つまり、固定的なネガティブスキーマがネガティブな情報に注意を向けるためそれを記憶し、ネガティブな判断をしやすくなる。しかし病状の改善に伴う記憶回復を説明できないことから、ただ一つのスキーマが常に安定して働くのではないと修正され、より柔軟で状況依存的なスキーマの存在が考えられた。一般には、ある特定の状況に関与するスキーマを想定することで説明する。例えば、ある気分になると、被験者の持っている複数のスキーマのうち、その時の気分と一致したスキーマが活性化され、その活性化されたスキーマの内容に一致した情報だけが選択的に取り込まれるため気分一致効果が起こることが説明できる。また、特定の気分においてもスキーマが活性化されなければ、気分一致効果の得られない場合が生じることも予測できる。

例えば、符号化時に自己関連の処理を行った場合では、自己関連情報において対称的な気分一致効果が見られるのに対して、自己関連の処理を行わない場合では、気分の効果が見られないか、気分非対称性効果が見られることが指摘されている。すなわち、認知過程に何らかの形で自己 (self) が関与する場合に對称的な気分一致効果が認められやすいという現象がある。具体的には、刺激材料を自己に関連付けて処理すること (自己関連の処理) が気分一致効果の生起に重要

な要因であることや、気分による認知の歪みが自己に関連する情報で顕著に見られること（情報の自己関連性の影響）が指摘されている。例えば、Sedikides (1992a) は、1970年から1991年にかけて公刊された43編の論文の84実験の統計的検定のメタ分析を通じて、気分が自己に関連する認知に及ぼす効果を検証した。その結果、62%が対称的な気分一致効果、12%が気分不一致効果、26%がどちらとも言えない（気分の効果無し／非対称性効果）となった。全体として、ポジティブな気分でもネガティブ気分でも自己に関する判断、記憶、期待、行動を促進する、対称的な気分一致効果が支持できると結論付けている。

実際、筒井 (1998) は、自己関連判断と他者関連判断における気分一致記憶を検討した。被験者42名を符号化時に、特定の気分を喚起するような音楽を聴取させることにより、ポジティブ／ネガティブ／中立のいずれかの気分誘導した。各被験者に4秒間隔で視覚呈示したポジティブ／ネガティブな特性語（例；優しい、しつこい）各30語に対し、自分にあてはまるか否かを判断する自己関連判断、あるいは、母親にあてはまるか否かを判断する他者関連判断を行わせた後、検索時に自然な状態で偶発自由再生を行わせた。その結果、自己関連判断においては、ポジティブ気分の被験者は、他の気分の被験者よりも自己に関連すると判断したポジティブ語をよく再生し、逆にネガティブ気分の被験者は他の気分の被験者よりも自己に関連すると判断したネガティブ語をよく再生した。すなわち、自己に関連すると判断した語においてのみ対称的な気分一致記憶を示した。一方、他者記述判断においては、ポジティブ気分の被験者のみが他の気分の被験者よりも母親に関連すると判断したポジティブ語をよく再生した。すなわち、ポジティブ気分においてのみ気分一致記憶が認められるという、非対称な気分の効果を示した。

このように自己関連的処理では自己関連情報において対称的な気分一致効果が認められやすいことから、認知に及ぼす感情の影響には自己が関与しうると考えられた。そもそも自己と記憶の関係において、自己に関連付けて処理することによって記憶が向上することは自己関連付け効果として、特に自己に関連する語が関連しない語よりもよく記憶されることは適合性効果として示されている。Rogers, Kuiper, & Kirker (1977) は、 Craik & Tulving (1975) の実験方法を踏襲し、自己に関連付けるという認知的操作が単なる意味処理以上に記憶を向上させることを明らかにした。自分自身について内容の豊富なよく構造化されたセルフスキーマ (self-schema) の働きによって、自己関連的処理では、刺激材料を自己に関してあらかじめ持っている豊富な知識と結びつけるような深い精緻な処理が行われ、その結果として明確な記憶痕跡が生じ、更に再生の際に自己が検索の手がかりとなるため、高い記憶成績を導いたと解釈された。また、自己に関連する語の方がセルフスキーマによく統合されて符号化されるため、無関連な語よりも再生されたと考えられた。この自分に関する情報の処理に関わる特別なシステムであるセルフスキーマによって、自己に関連が深い情報処理が促進されるが、更に感情の結びついたセルフスキーマの働きによって、自己関連的処理では自己関連情報において対称的な気分一致記憶が促進されると考えられる。

一方、ネガティブ気分が自己焦点的注意 (self-focused attention) を引き起こすと報告されている (Carr, Teasdale, & Broadbent, 1991 ; Cunningham, 1988ab ; Cunningham, Steinberg, & Grev, 1980 ; Sedikides, 1992b ; Wood, Saltzberg, & Goldsamt, 1990)。自己焦点的注意とは、人が自分自身の方へ注意を向けることによって、自己に対する注意が高まった状態を指す（押見、

1990)。例えば、Sedikides (1992b) は、ある出来事をイメージさせることで気分を誘導し、ポジティブ気分とネガティブ気分が生じた場合では注意の向けられる方向が違い、ネガティブ気分は自己に対して注意を向けるが、ポジティブ気分は注意が外に向けられるようになることを明らかにした。

スキーマモデルによれば、気分がその気分と一致するスキーマを活性化し、そのような活性化が関連する情報処理を促進するが、ネガティブな気分が喚起されても必ずしもネガティブスキーマの活性化によってネガティブな情報が選択的に処理されるとは限らないとする。ネガティブ気分は自己に注意を向けることによって自己に関する処理を行った場合にのみ、セルフスキーマのネガティブな側面である、ネガティブセルフスキーマを活性化させることによって、自己に関連する情報においてネガティブ気分における気分一致記憶が認められると考えられる。つまり気分一致記憶に関する従来の説明のように、気分は直接自動的に認知に影響を及ぼすだけでなく、生じた気分が自己へ注意を向け、自己関連的な情報処理を介在させることによって、気分一致記憶が得られるとも考えられる。しかし、自己に関連する情報処理と一括されており、自己に関する情報が重要であるのか、セルフスキーマによる処理が重要であるのか、また、どのような自己が関与する処理か、どのような自己の側面に関連付けた処理か等の議論はなされてこなかったという問題点がある。

2 実 験

2.1 目 的

筒井 (1998) は、自己にあてはまるか否かを判断させる自己関連判断を行うことでセルフスキーマを利用するよう操作した場合に、自己に関連すると判断した語 (以下自己関連語) においてのみ対称的な気分一致記憶が認められ、処理される情報の自己関連性によって気分の影響が異なることを示唆した。自己関連判断において自己関連語は、その気分と一致した特定の感情価を持つセルフスキーマの働きによって、他の自己に関連しない語や気分と一致しない語よりもより深く精緻な処理が選択的に行われるため、気分一致記憶が得られたと考えられた。更に、母親にあてはまるか否かを判断させる他者関連判断を行うことで他者スキーマを利用するよう操作した場合に、他者関連語においてポジティブ気分でのみ気分一致記憶が認められた。ポジティブ気分では他者に関するポジティブな情報が選択的に処理されたのに対して、ネガティブ気分では他者に関するネガティブな情報が処理されるわけではなかったことから、ネガティブ気分における気分一致記憶はセルフスキーマによる処理が重要であると示唆された。

しかし学習時に行う自己関連判断には、情報の持つ感情価に対して、意識せずに生じる社会的に望ましいか否か等の評価的感情に基づくような評価的処理が伴うと考えられる。必ずしも自己に関連付けなくても、自己関連的処理に含まれると考えられる評価的処理においてはいい反応をすることが気分一致記憶の生起要因である可能性があると考えられる。それ故、気分一致記憶の生起にセルフスキーマによる自己関連的処理が重要かは明確に言えない。また、ネガティブ気分の被験者が自己に注意を向けているなら、学習時に行う方向付け課題に関わらず、自己に関連する情報ではネガティブ気分の効果が認められる可能性があるとも考えられる。特にネガティブ気分

における気分一致記憶の生起に、情報の自己関連性が重要であるかは明確ではない。

そこで学習時に評価的処理を促す、社会的望ましさに対する評価判断課題を行わせて、その再生成績を自己に関連する情報か否かで分類し、自己関連判断課題における気分の効果と比較する。

1. 自己関連的処理が気分一致記憶の生起に重要であるならば、評価的処理では気分一致記憶が認められないであろう。
2. 処理される情報の自己関連性が気分一致効果の生起に重要であるならば、評価的処理を行った場合でも、自己に関連する情報においては気分一致記憶が認められるであろう。

2. 2 方 法

2. 2. 1 被 験 者

ポジティブな気分を誘導するポジティブ群（以下ポジ群）、ネガティブな気分を誘導するネガティブ群（ネガ群）、特定の気分を誘導しない統制群の3群を設定した。大学（院）生男女計42名を、各誘導気分群に14名ずつ男女が偏らないようランダムに割り振った。その内、後に述べるように気分の誘導が十分でなかった被験者は分析から除外されたため、最終的に、ポジ群12名・ネガ群13名・統制群12名となった。

2. 2. 2 材 料

刺激語：筒井（1998）と同様、青木（1971）より選択した特性語のうち、社会的に望ましい語（快語）・望ましくない語（不快語）を、別の被験者32名による自己記述評定の平均が中央付近になるよう各30語を選択した¹。それらをランダムに並べたリストを2種類用意し、そのリストに初頭性効果・新近性効果を除くために分析に加えないフィラー語を最初と最後に各5語加えた。作成された計70語のリスト2種類のうちいずれかを各被験者に割り当てた。

音楽：筒井（1998）と同様、谷口（1995）を参考に、ポジティブ気分を誘導する音楽として、サティ“ピカデリー”、アンダーソン“ワルツィング・キャット”、アレインベルク“森の水車”、シュトラウス“美しく青きドナウ”を、ネガティブ気分を誘導する音楽として、リゲティ“ソプラノ、メゾ・ソプラノ2つの混声合唱と管弦楽のためのレクイエム”、シベリウス“チューオネラの白鳥”“悲しきワルツ”、アルビノーニ“弦楽とオルガンのためのアダージョ”を、全体で同じ長さ（約20分間）になるように選んだ。

気分評定用紙：筒井（1998）と同様、寺崎・古賀・岸本（1992）の多面的感情状態尺度より作成した、典型的な肯定的感情状態とされる活動的快・非活動的快・親和、典型的な否定的感情状態とされる抑鬱不安・敵意・倦怠の尺度から各々5項目計30語からなる質問用紙を用いた。これらの語について、“現在、以下の感情をどの程度感じていますか”と尋ね、それぞれ5段階で評定してもらった²。なお、質問用紙は各項目をランダムに並べ替え4種類用意した。

2. 2. 3 装 置

刺激語はパーソナル・コンピュータ（NEC製PC9801VM）によりCRT（PC-KD852）に呈示した。音楽はあらかじめコンパクト・ディスクからカセット・テープに録音しておいたものを、テープレコーダー（SHARP製QT-C300）により呈示した。

2. 2. 4 手続き

気分誘導：被験者が実験室に入室すると同時に、該当する条件に合わせて予め録音しておいた誘導音楽をテープレコーダーを用いてスピーカー再生し、3分間程度聴取させた。音楽はこの後の刺激語学習中も中断なく連続して呈示し続けた。その後気分評定用紙に記入させた。統制群は音楽を呈示せずに気分評定から実験を開始した。

刺激語の学習と再生：次にCRTの中央に各刺激語を4秒ずつ呈示した。試行間隔は1秒とした。刺激語の大きさはCRT上で1文字あたり約5mm×5mmであった。被験者には学習課題として、各刺激語が“社会的に望ましいか否か”を判断させ（以下評価判断）、できるだけ速くかつ正確に、キーボード上の、はい/いいえに対応するキーを押すよう求めた。反応は利き手の人差し指と中指で行うよう教示し、どちらの指を“はい”に割り当てるかは被験者間でカウンターバランスした。後に記憶テストがあることは予告しなかった（偶発学習）。学習終了後、再度、気分評定用紙によって被験者の気分を評定させた³。この段階で、気分誘導群に呈示していた音楽を止めた。引き続き自由再生を書記にて5分間行わせた。その後、学習時に呈示された刺激語に対して、“自分にあてはまるか否か”を判断させた（以下自己関連判断）。実験全体での所要時間は、気分誘導群で約25分、統制群で約22分であった。

2. 3 結果

2. 3. 1 気分得点

各尺度毎の気分得点において、被験者全体の平均から±2SD以上の逸脱が見られた被験者のデータは、以下の全分析から除外した（ポジ群1名、ネガ群0名、統制群1名）。各条件毎の1項目当たりの気分得点⁴の平均・SDをTable 1に示す。

Table 1 各群における気分尺度及び評定時期別の気分得点の平均とSD

誘導気分	肯定的感情状態								否定的感情状態				
	活動的快		非活動的快		親和		抑鬱不安		倦怠		敵意		
	課題前	課題後	課題前	課題後	課題前	課題後	課題前	課題後	課題前	課題後	課題前	課題後	
ポジ群	平均	3.39	3.23	3.64	3.51	2.63	2.61	2.47	2.38	1.95	2.04	1.45	1.46
	SD	0.72	0.75	0.66	0.77	0.53	0.74	0.62	0.53	0.57	0.81	0.45	0.52
ネガ群	平均	2.07	1.78	2.58	2.45	2.33	2.14	3.28	3.18	2.47	2.56	2.09	2.09
	SD	0.55	0.48	0.74	0.86	0.91	0.78	0.70	0.71	0.71	0.98	0.75	0.79
統制群	平均	2.79	2.51	3.38	3.06	2.45	2.42	2.24	2.18	2.09	2.18	1.54	1.54
	SD	0.71	0.72	0.80	0.84	0.85	0.90	0.92	0.93	0.71	0.75	0.54	0.54

次に、実際に被験者の気分が実験者の意図通りに誘導されていたかを確かめるために、気分得点について各尺度毎に誘導気分3×課題前後2の分散分析を行った結果、全尺度で気分の主効果が有意となったので、音楽によって期待された気分は誘導されていたとみなしても差し支えないであろう。

2. 3. 2 判断数

被験者が各刺激語に対して社会的に望ましいとはい反応した数を判断数とした。各条件毎の判断数の平均・SDを Table 2 に示す。

Table 2 各条件毎の判断数の平均とSD

誘導気分 刺激語	ポジ群		ネガ群		統制群	
	快語	不快語	快語	不快語	快語	不快語
平均	27.62	2.85	29.43	1.43	29.31	0.62
SD	3.87	6.02	0.62	2.61	1.38	0.92

判断数について、誘導気分3×刺激語2の分散分析を行った結果、刺激語の主効果のみが有意となり、誘導気分の主効果及び交互作用は認められなかった。すなわち、気分の影響が認められなかった。

2. 3. 2 再生数

各条件毎の再生数の平均・SDを Table 3 に示す。

Table 3 各条件毎の再生数の平均とSD

誘導気分 刺激語	ポジ群		ネガ群		統制群	
	快語	不快語	快語	不快語	快語	不快語
平均	3.92	3.15	4.07	3.50	4.92	2.77
SD	2.30	1.92	1.91	1.40	1.77	1.48

再生数について、誘導気分3×刺激語2の分散分析を行った結果、刺激語の主効果のみが有意となり、誘導気分の主効果及び交互作用は有意にはならなかった。すなわち、気分の影響が認められなかった。

2. 3. 4 自己関連性別再生率

学習時に評価判断をしてもらった被験者に、再度各刺激語に対して自分にあてはまるか否かの自己関連判断をもらった。被験者があてはまる（関連）あるいはあてはまらない（無関連）と判断したそれぞれの語のうち、再生されたものの割合を自己関連性別再生率とした。各条件毎の再生率の平均を Figure 1 に示す。再生率について、誘導気分3×関連性2×刺激語2の分散分析を行った結果、関連性と刺激語の交互作用 ($F(1,37) = 5.90, p < .05$) 及び3要因の交互作用が有意になった ($F(2,37) = 3.44, p < .05$) ので下位検定を行ったところ、自己関連語において不快語：ネガ群>ポジ群、ネガ群：不快語>快語となり、自己関連語においてネガ群でのみ気分一致記憶が認められた。また、不快語においてネガ群：関連語>無関連語となり、ネガ群でのみ気分一致する語において自己関連語は無関連語よりも多く再生された。

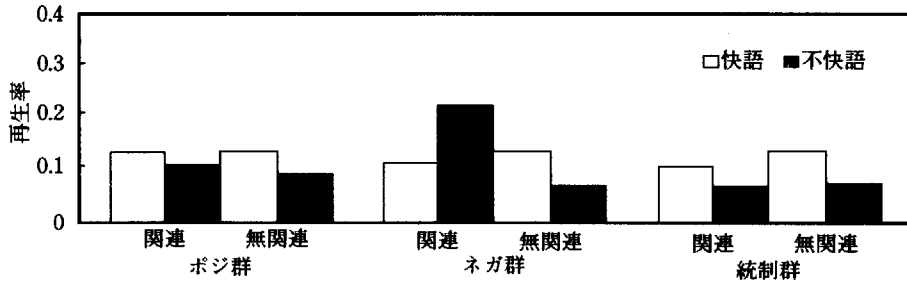


Figure 1 各群毎の自己関連性別再生率

2. 4 考 察

以上の結果から、

1. 判断数では気分の影響がみられず、気分一致判断は認められなかった。
2. 再生数では気分の影響が見られなかった。
3. 自己関連性別再生率では気分の影響が見られ、ネガティブ気分の被験者でのみ、自己関連語において、気分一致記憶が認められた。また、気分一致する語において、自己関連語は無関連語よりも多く再生された。

結果1に対して、社会的に望ましいか否かの評価判断は、既存の知識に基づいて正確な判断を求めており、単なる事実判断に近いと考えられる。このような判断を行っている場合、被験者は恐らく正確に答えようという動機が働いたため、誘導気分の影響を受けなかったのであろう。気分の影響によってその気分と一致する特性概念が活性化されていても、判断時にそれを利用しなかったためであろう。

結果2に対して、評価的処理では気分一致記憶は認められなかったことから、自己関連的処理が気分一致記憶の生起に重要であることが示され、仮説1は支持された。この結果は以下の先行研究と一致する。学習時の方向付け課題として、使用頻度評定をさせた場合に、ポジティブ気分でもネガティブ気分でも気分一致記憶は見られない(谷口・藤田・筒井, 1995)し、特に方略を与えなかった場合でもネガティブ気分の気分一致記憶は見られなかった(藤田・谷口・筒井, 1995)。更に処理水準パラダイムを用いた研究では、形態・音韻・意味処理判断をさせた場合には気分一致記憶は認められなかった(Brown & Taylor, 1986; Derry & Kuiper, 1981; Dobson & Shaw, 1987; Hammen & Zupan, 1984)。検索手がかりとしての気分の効果は弱いと指摘されており(川瀬, 1989, 1992)、気分は記憶検索のための内的な手がかりにすぎず、その効果は例えば判断対象や状況等の外的な手がかりに比べて弱いと考えられる。従って、他の外的な手がかりによってその効果は失われてしまうのだろう。学習時に具体的な対象について具体的な判断を求められている場合には、検索時にそれらの手がかりに依存するため気分の効果は認められにくいのだろう。

結果2, 3に対して、ネガティブ気分では、評価的処理を行った場合でも、自己に関連する情報においては気分一致記憶が認められたことから、処理される情報の自己関連性が気分一致記憶

の生起に重要であると示され、仮説2は部分的に支持された。被験者は単に誘導された気分と一致する語をよく覚えていたわけではなかった。誘導気分と一致するスキーマが活性化され、そのスキーマに関連する刺激語が選択的に符号化されなかった。特に、ネガティブ気分の被験者は自分に関連するネガティブ語をよく覚えていたが、自分に関連しないネガティブ語をよく覚えていたわけではなかった。処理される情報の自己関連性によって気分の効果が異なることが示唆された。少なくとも、ネガティブ気分における気分一致記憶の生起に、処理する情報が自己に関連するか否かという、情報の自己関連性が重要であると言えよう。

更に、結果3に対して、この結果は、学習時に自己関連判断を行った筒井(1998)のネガ群における再生率の結果(Figure 2に示す)と一致する。このことから、ネガ群では学習時に自己関連判断に類似した処理が行われていた可能性があるとも考えられる。すなわち、ネガティブ気分が自己焦点の注意を引き起し、活性化されたネガティブセルフスキーマと一致する感情価を持つ自己関連情報が取り込まれ、その符号化が促進されたのではないだろうか。ネガティブ気分の被験者は必ずしもネガティブスキーマ全体を活性化させるのではなく、ネガティブセルフスキーマを活性化し、それを利用することによって、自己関連語においてネガティブ気分における気分一致記憶が認められたのかもしれない。つまり気分一致効果に関する従来の説明のように、気分は直接自動的に認知に影響を及ぼすだけでなく、生じた気分が自己へ注意を向け、自己関連的な情報処理を介在させることによって、気分一致記憶が得られるとも考えられる。

また、筒井(1998)の自己関連判断課題のように実際に学習時に自己に関連付ける意図的な処理を行わなくとも、自己焦点の注意による自動的なセルフスキーマの活性化によってネガティブ気分一致記憶が生じたと考えられる。意識的に行うか否かに関わらず、自己が関与する処理がネガティブ気分における気分一致記憶を媒介するのではないだろうか。

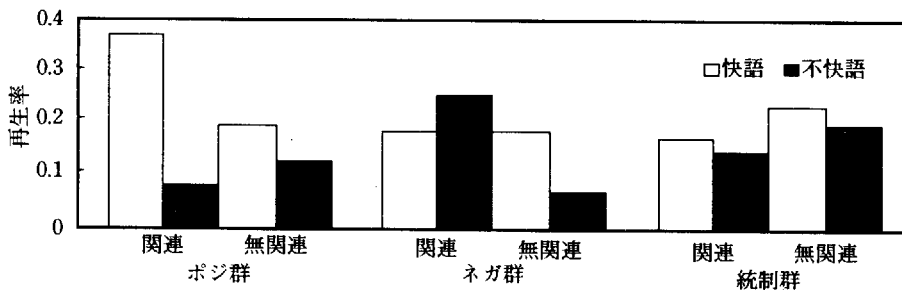


Figure 2 筒井(1998)における各群毎の自己関連性別再生率

3 気分一致効果の生起要因について

本実験により、記憶課題の自己関連性別再生率において、ポジティブ気分とネガティブ気分の効果が異なり気分非対称性効果が得られたことから、両気分の記憶過程に及ぼす影響が異なることが示唆された。従って、気分一致記憶の生起要因もそれぞれ異なることが予想される。

3. 1 ポジティブ気分における気分一致記憶

学習時に自己関連の処理を意識的に行わせる場合では、ポジティブ気分と一致するポジティブセルフスキーマが活性化され、それに基づいて判断を行うため、そのスキーマに合う特性概念の処理が選択的に行われる。それに対し、学習時に評価的な処理を行わせる場合では、気分状態とは関連しない社会的な規範に従って望ましい特性概念が単に選択的に処理されるにすぎないため、ポジティブ気分一致記憶は認められないのであろう。従って、ポジティブ気分では、情報処理を行う際に用いられる何らかの既存の知識構造がその気分と関連することが、気分一致記憶に重要であると考えられる。

3. 2 ネガティブ気分における気分一致記憶

学習時に自己関連の処理を意識的に行った場合でも、学習時に自己に注意を向けることにより意識せずに自己関連の処理を行ったと考えられる場合でも、ネガティブ気分と一致するネガティブセルフスキーマが活性化され、そのスキーマに適合するか否かの精緻的な処理が行われるため、適合する自己関連語において気分一致記憶が認められるのであろう。従って、ネガティブ気分では、自己関連的な情報の処理を媒介すること、すなわち、気分と自己関連性との相互作用が気分一致記憶に重要であると考えられる。

では、ネガティブ気分における気分一致記憶の生起に、なぜ自己に関する情報の処理が重要なのであろうか。符号化時に自己に関連させた処理を行うと記憶保持が優れることは一貫して認められてはいるものの、その生起要因については様々な理論が乱立しており十分に明らかにされていない (e. g., 堀内, 1995)。近年では、何らかの自己の認知構造を仮定する認知的要因と、自己に関連付けて刺激を処理すると、そこに必ず一定の価値評価が伴うため刺激に対し好悪の感情が付加され、この感情の付加がその刺激の記憶を促進することにつながるとする感情的要因との両方が自己関連付け効果に関与するとされている (稲葉・林, 1993)。このように自己に関する処理には必ず何らかの評価を喚起する感情が伴うことから、ネガティブ気分ではネガティブセルフスキーマの活性化によってネガティブ情報が選択的に処理されるのは、ネガティブ気分における気分一致記憶はネガティブセルフスキーマによる感情の喚起を媒介するためと考えられる。ネガティブ気分における気分一致記憶は単に誘導された気分と刺激語の感情価の一致というよりも、刺激語から喚起される感情との一致であり、気分一致記憶は気分と情報の持つ感情価が一致すれば必ず得られるわけではなく、また気分そのものが気分一致記憶の直接的な原因ではないとも考えられる。恐らく、ネガティブ気分の被験者は自己に注意が向き、社会的に望ましいか否か

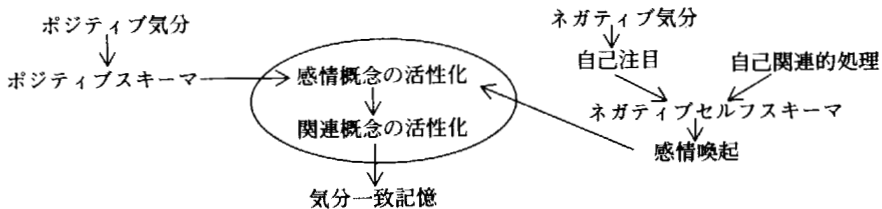


Figure 3 気分一致記憶の生起過程

の判断が求められていても、個人的に望ましいか否かの判断等、刺激語をより自己に関連付けて処理することによって、その刺激語の持つ感情価と一致する感情が喚起されやすくなる。自己関連語においてのみネガティブ気分一致記憶が認められたのは、例えば“冷淡な”という語の評価判断では、ネガティブな気分の被験者である方が、自己に注意を向けることによって、“冷淡な”というネガティブな評価を示す属性を自分が持つと考えるというように、この自己に関連する不快語をより自己に関連付けて処理し、ネガティブな感情が喚起されたためだろう。自己に関連しない語において気分一致記憶が認められなかったのは、刺激語を自己に関連付けて処理しないため、感情が喚起されなかったのであろう。

以上の得られた知見から次のように考えられる。主体としての自己が関与することにより感情が喚起されることがネガティブ気分一致記憶の生起に重要なのである。それに対し、客体(対象)としての自己が関与することはネガティブ気分一致記憶の生起に重要ではなく、気分の影響が単に反映されやすいに過ぎない。セルフスキーマは主体としての自己が客体としての自己を効率的に処理する機能的な役割を担っていると考えられるため、セルフスキーマが活性化され利用されるときはポジティブ気分でもネガティブ気分でも対称的な気分の効果が認められ、更にその気分の効果は自己に関する情報において明確に認められるのだろう。

本研究では自己に関連する情報の処理における気分の効果を検討し、気分が記憶過程に影響を及ぼすことを示した。日常場面で、自覚的でない気分は弱いながらも常に生起していることから考えると、それが現実の情報処理に対してわずかではあっても一定の影響を及ぼしていると考えられる。つまり、自分でも気づかぬうちに気分の影響によって歪められた情報処理をしている可能性があり、気分の影響力は推測される以上に大きいのかもしれない。

3. 3 最後

谷口(1997)は、認知は独立した絶対的な存在でたまたま感情の影響を受けることもある、というのではなく、感情と認知を人間が環境に適応し、行動するための大きな情報処理システムの中に同等に位置づけて考えてみることも必要ではないか、と問いかけている。また、認知と感情の相互作用について、池上(1997)も、感情は処理される情報の内容や処理方略を変化させることで認知を規定するが、その過程は感情に先行する認知(環境の認知的評価)に潜在的に規定されているという関係が、環境への適応を実現しているとも言える、と述べている。情報が認知システムと感情システムの相互作用によって処理され、その結果が適応反応となる。同時にそれが環境等に影響を与えたり、自身にフィードバックされることによって行動を変化させたりする。この人間の情報処理は様々な要因の影響を受けて容易に歪む傾向があり、現実の忠実な複写ではなく、むしろ選択的符号化、検索、推論、評価、再解釈等の積極的な再構成過程を特徴とする。感情-認知研究において、感情から認知への影響だけでなく、認知から感情への研究をも進める重要性と同時に、改めて適応的な感情の動きの再考が求められていると言えよう。

謝辞

本論文作成にあたり、ご指導、ご示唆を頂きました、京都大学大学院教育学研究科助教授吉川左紀子先生に厚く感謝申し上げます。

註

- 1 被験者の誰もが自己関連／無関連だと判断するような語を除くために行った。評定は、非常にあてはまる、かなりあてはまる、少しあてはまる、どちらとも言えない、ややあてはまらない、ほとんどあてはまらない、全然あてはまらない、の7段階で行われ、数値が大きい程自分にあてはまることを表す。
- 2 評定は、はっきり感じている、少し感じている、どちらでもない、あまり感じていない、全く感じていないの5段階で行われ、数値が大きいほどその感情状態を感じていることを表す。
- 3 2回目の気分評定は1回目とは異なる項目順の質問紙を用いた。
- 4 得点範囲は1点から5点で、高得点ほどその尺度の傾向が高い。

参考文献

- 青木孝悦 1971 性格表現用語の心理—辞典的研究— 455語の選択, 分類および望ましきの評定 — 心理学研究, 42, 1-13.
- Beck, A. T. 1967 *Depression: Clinical, experimental, and theoretical aspects*. New York: Holber.
- Blaney, P. H. 1986 Affect and memory. *Psychological Bulletin*, 99, 229-246.
- Bower, G. H. 1991 Mood congruity of social judgements. In J. P. Forgas (Ed.), *Emotion and social judgments*. Pergamon Press, 31-54.
- Bower, G. H., Gilligan, S. G., & Monteiro, K. P. 1981 Selectivity of learning caused by affective states. *Journal of Experimental Psychology: General*, 110, 451-473.
- Brown, J. D. & Taylor, S. E. 1986 Affect and Processing of personal information: Evidence for mood-activated self-schemata. *Journal of Experimental Social Psychology*, 22, 436-452.
- Carr, S. J., Teasdale, J. D., & Broadbent, D. 1991 Effects of induced elated and depressed mood on self-focused attention. *British Journal of Clinical Psychology*, 31, 273-275.
- Craik, F. I. M. & Tulving, E. 1975 Depth of processing and the retention of words in episodic memory. *Journal of Experimental Psychology: General*, 104, 268-294.
- Cunningham, M. R. 1988a Does happiness mean friendliness?: Induced mood and heterosexual self-disclosure. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 14, 283-297.
- Cunningham, M. R. 1988b What do you do when you're happy or blue?: Mood, expectancies, and behavioral interest. *Motivation and Emotion*, 12, 309-331.
- Cunningham, M. R., Steinberg, J., & Grev, R. 1980 Wanting to and having to help: Separate motivations for positive mood and guilt induced helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 181-192.
- Derry, P. A. & Kuiper, N. A. 1981 Schematic processing and self-reference in clinical depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 90, 286-297.
- Dobson, K. S. & Shaw, B. F. 1987 Specificity and stability of self-referent encoding in depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 96, 34-40.
- Ellis, H. C. & Ashbrook, P. W. 1989 The "state" of mood and memory research: A selective review. In D. Kuiken (Ed.), *Mood and Memory: Theory, research, and applications*. Newbury Park: Sage. Pp. 1-21.
- 藤田哲也・谷口高士・筒井美加 1995 気分一致効果の生起条件Ⅱ — 刺激語学習時に方向付け課題がない場合 — 日本教育心理学会第37回大会発表論文集, 191.
- Guenther, R. K. 1988 Mood and memory. In G. M. Davis & D. M. Thomson (Eds.), *Memory in context: Context in memory*. New York: Wiley. Pp. 57-80.

- Hammen, C. & Zupan, B. A. 1984 Self-schemas, depression, and the processing of personal information in children. *Journal of Experimental child Psychology*, 37, 598-608.
- 堀内 孝 1995 自己関連づけ効果の解釈をめぐる問題 名古屋大学教育学部紀要, 42, 157-170。
- 池上知子 1997 社会的判断と感情 海保博之編 「温かい認知」の心理学 Pp. 99-119。
- 稲葉晶子・林龍平 1993 自己準拠効果 (self-reference effect) に関する最近の研究 茨城大学教育学部紀要 (教育科学), 42, 165-181。
- 川瀬隆干 1989 感情が記憶に及ぼす影響：研究のレビューと今後の展望 立教大学心理学科研究年報, 32, 28-42。
- 川瀬隆干 1992 日常的記憶の検索に及ぼす感情の効果 — 検索手がかりの自己関係性について — 心理学研究, 63, 85-91。
- Kuiken, D. 1991 *Mood and Memory: Theory, research, and applications*. Newbury Park: Sage.
- Morris, W. N. 1989 *Mood. The flame of mind*. New York: Springer-Verlag.
- 押見輝男 1990 「自己の姿への注目」の段階 中村陽吉 (編) 「自己過程」の心理学 東京大学出版会, Pp. 21-65。
- Rogers, T. B., Kuiper, N. A., & Kirker, W. S. 1977 Self-reference in the encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 677-688.
- Sedikides, C. 1992a Changes in the valence of the self as a function of mood. In M. S. Clark (Ed.), *Emotion and social behavior: Review of Personality and Psychology*, Volume 14, Newbury Park, CA: Sage, Pp. 271-311.
- Sedikides, C. 1992b Mood as a determinant of attentional focus. *Cognition and Emotion*, 6, 129-148.
- Singer, J. A. & Salovey, P. 1988 Mood and memory: Evaluating the network theory of affect. *Clinical Psychology Review*, 8, 211-251.
- 谷口高士 1995 音楽の感情価と聴取者の感情的反応に関する認知心理学的研究 京都大学大学院教育学研究科博士論文 (未公刊)
- 谷口高士 1997 第3章 記憶・学習と感情 海保博之編 「温かい認知」の心理学 Pp. 53-75。
- 谷口高士・藤田哲也・筒井美加 1995 気分一致効果の生起条件 I — 刺激語学習時に方向付け課題がある場合 — 日本教育心理学会第37回大会発表論文集, 190。
- 筒井美加 1998 自己関連的処理における気分の効果について 京都大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊)
- 寺崎正治・古賀愛人・岸本陽一 1992 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356。
- Wood, J. V., Saltzberg, J. A., & Goldsamt, L. A. 1990 Does affect induced self-focused attention? *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 899-908.

(博士後期課程 1 回生, 教育認知心理学講座)